

100年後の楽しみ

藤井颯太郎

「100年後、私たちはもう一度ここへ帰ってくるのです！」

地球上に生き残った人類、150万人の視線は、拳を掲げ演説する恰幅の良い男に注がれていた。男の宣言を合図に、大地を覆っていた布が取り去られ、街一つ分はありそうな大穴が姿を現す。穴の中には、黒光りする巨大なタイムカプセルが埋められている。

「ご存じのように太陽と地球は引かれ合い、数億年に一度の周期で接近しては遠のきを繰り返しているのです。太陽が最も地球に接近する時期には地球の平均気温は100度を超えてしまいます。そこで、人類は一艘の宇宙船に乗り込み、地球がまた人間が生存できる環境に戻るまでの100年間、宇宙で生活を送ることにしたのです」カプセルの天板に銀河系が映し出され、地球から飛び立った宇宙船が遠く離れた惑星へと向かう映像が流される。

「すぐに各国の協力のもと、宇宙船に乗せるべきモノ、つまり後世に残すべきモノを集めました。しかし、何度計算しなおしても宇宙船に乗せ切ることはいけません。私たちは素晴らしき人類の歴史をここで失ってしまうのでしょうか？」

オーケストラが壮大なシンフォニーを奏で、その音に応えるかのようにタイムカプセルの蓋が重々しく、ゆっくりと開いていく。「私達は何も失いません。現代化学のスイを集めつくれたこの〈箱舟〉があるからです！」

数千人の係員によって、金魚鉢や常備薬やスタンドライトなど生活を代表するものの中から、油絵や楽譜、彫刻などの芸術品に至るまで、ありとあらゆるものが次々と〈箱舟〉の中へ運び込まれていく。

「この〈箱舟〉に保管された後世に残すべき人類の宝は、万全の状態で管理されのまま、安全に100年後の世界へと送り届けられます。〈箱舟〉は、100年後の人類へ送る、我々からのギフトなのです」男の演説に、取り囲む群衆は歓声を上げた。

※

少女は大人達の熱狂とは対照的に、退屈していた。両親は先程から自分を構ってくれないし、周りの大人達が狂ったように奇声をあげているのにも辟易していた。下を覗けばカプセルが大きな口を開けてこちらを見ている。少女はイタズラを試みたい気持ちに駆られ、バレないようにこっそりと石を投げ入れた。石は誰にも見つかることなく吸い込まれるように落下していき、ちょうど、芸術品を固めて保管してあるあたりに落ちた、ように見えた。100年後の人類が、ただの石を人類の宝だと勘違いして美術館に飾る姿を想像するだけで、少女の胸は弾んだ。

石は芸術品を保管しているエリアへ落ちていき、金属製の彫刻に当たって火花を散らした。火花は近くの絵画に燃え移り、ぷすぷすと煙を上げ始め、その火は隣へ上へと燃え広がっていく。セレモニーも終盤に差し掛かり、カプセルの蓋が轟音を立てて閉じられていく。立ち上る砂煙のせいで、漏れ始めた煙を気に留める人は全くいなかった。パチパチと爆ぜる音が、群衆の拍手に紛れ人類の未来を祝福していた。

「私達はもう一度ここへ帰ってきます。そして、人類の宝と再会を果たすのです。それだけを心の支えとして、これからの100年を過ごしましょう。皆さん、箱舟に挨拶をしてください。100年後にまた会いましょう」

